「ブドウ育種の想い出」

2014年10月25日・南アルプス市健康福祉センターにて

「飯野地区生涯学習研修会・講演要旨」

（株）植原葡萄研究所　代表取締役　植原宣紘

１．「味の競争時代」

　1970年（昭和45年）10月16日、全国農業新聞・山梨版に、「“味の競争”時代に対応」“ブドウの品種改良に取り組む植原さん”という記事がある。

「全国一のブドウ産地を誇る山梨県では、これまで「甲州」、「デラウエアー」、「ネオマス」などに加え数年前から「巨峰」、「甲斐路」といった大粒品種が登場、県果樹試験場や一部研究熱心な栽培農家が新品種の改良に取り組んでいる。在来品種はもとより、外国からは優秀な品種をとりよせて交配させ、品種改良の試みを盛んに行っている。在来品種だけではどうしても“味の競争”時代には勝てず、また農家収益の向上にもつながらないからである。一方、今日、果物の自由化問題が叫ばれている中で、外国の豊富な果実に対抗していくためにも良品で高水準の果実を安価に供給することが急務とされている。

　こういう中で親子二代にわたりこの道一筋に、品種改良に積極的に取り組み、多くの功績を残している甲府市善光寺町植原宣紘さん（30才）は、「デラ」や「甲州」、「ネオマス」など、一般品種の栽培のほか、土壌の研究、苗木の生産、新品種の研究など幅広く行っている。

　特にこの中でも新品種へかける長年の研究意欲はこれまで何百種の品種改良を試み、現在、消費者の好みに対応させようとヨーロッパ系、ソ連系、インド、アメリカ系、色とりどりのブドウを交配させ、つぎつぎと新しい味覚を発表し、一般出荷用ブドウのほか70種に及ぶ新品種を栽培、一方では苗木の生産を行い、その紹介は全国一円にわたっている。特に新品種は、県内はもとより、新興産地へも積極的に出荷している。

　当所作出の代表的なものに「マスカット甲府」、「甲斐路」、「バイオレット植原」、「マスカットルビー」がありこれらは独自に交配し、育種したものである。また、本年新たに発表した「スチューベン×ヒムロット」は米国系の色が濃くて強健で、栽培容易の完全無核早熟種である。

　このような一般研究栽培農家の意欲は食生活の向上にマッチした新鮮な風味を与え、需要者の目をうるおしてくれるものと期待されている」

　以上が、44年前に当時の育種の実情を丁寧にご紹介下さった、全国農業新聞の懐かしい記事である。

２．「父・植原正蔵の想い出」

　ブドウの育種は父親の正蔵（大正元年生まれ）が祖父・仙蔵（明治11年生まれ）のブドウ栽培を引き継いだあと、研究を重ね、昭和初期から始めたものである。それにはきっかけがあった。父親の青年時代、後に「巨峰」（昭和12年交配）を育成した、日本のブドウ栽培の大先達、大井上康（中伊豆）が地元里垣村（現善光寺、東光寺、酒折町）役場に招かれ、ブドウ栽培農家を集めた講演会が行われた。その講演を直接聞いた父は、「ブドウ産業の発展は育種にあり」という大井上康の言葉に感激し、志しを立てた、という。後継者としてブドウを栽培するなら、育種の研究をしたい。ありきたりのブドウ品種を栽培するだけでは物足りない、と日頃考えていたのである。

父・正蔵は大井上康の「葡萄の研究」（昭和5年発行）、もう一人の大先達、川上善兵衛（「マスカットベリーＡ」を作出・新潟県）の「実験葡萄全書」（上、中、下篇、昭和7年発行）を熟読して勉強し、長男の私（宣紘、昭和15年）の生まれる前からブドウを交配し始め、新品種を目指していた。

　父はブドウ農家の長男として甲府市里垣村で生まれた。祖父・仙蔵は庄屋の次男だったが働き者で農地を増やし、甲州ブドウを大栽培していた。祖父の頑丈な体と違って、長身で痩せ型の父親は健康には恵まれず、最初はブドウ栽培の跡を継ぐのを嫌がったという。甲府商業高校出の父は東京に出て「明治屋」で働き、輸入ワインなども販売していたこともある。家に戻った後も、結核や脊髄カリエスを患い、脊髄内のコブを切除した際、片足の神経を切ってしまい、生涯、細い足を引きずっていたことを幼少の私は覚えている。

「巨峰」を作出した大井上康の伝記を調べると、この大先輩も幼少時代の病気のため、片足が不自由だったという。いまでこそ生産量第一位の「巨峰」は、極端に花振るいする欠点があり、発表当時はその栽培が困難を極めたため、あまり普及せず、世間に認められる前に60歳で他界してしまった不遇の大井上康だが、その後、「巨峰」は栽培家の努力で徐々に欠点を克服して栽培に成功し、後に「ブドウの王様」として全国的に大栽培される品種になった。一方、20数回の入退院を繰り返し、66歳で他界した父･正蔵は「甲斐路」を育成した。共に60代の若さで他界した、足の不自由な育種家・二人のこの偶然の一致に、私は驚いたものである。

　前述した「葡萄の研究」、「実験葡萄全書」は分厚い研究書で各々、当時の働き手の一ヶ月分の給料に相当した高価な本だった。これらを購入したいという父親に、倹約家の祖父は大反対したという。ブドウ農家の跡継ぎになるという条件で、父・正蔵は祖父に粘り強く交渉し、祖父は渋々承諾したという。

　戦前のある朝、暗いうちに起きた父は番頭を連れて50アールの甲州ブドウ畑に行き、全部の枝を切り落としてしまった。密かに朝鮮（今の北朝鮮）の苗木業者・葛目ブドウ園から取り寄せてあった新品種「ネオマスカット」の芽を甲州に接いでしまったのである。祖父には甲州が凍害で枯れたと嘘をついたが、「ネオマスカット」が育ったので嘘がバレてしまい、祖父はカンカンに怒ったという。50アールという面積は、昔から「五反百姓」と言葉があるとおり、平均的農家の栽培面積であり、一度に全部の木を切ったのだから5年間ほどはブドウの収穫は期待できず、ブドウはほぼ無収入になってしまったのである。

　「ネオマスカット」の親は父が憧れていた岡山県特産のガラス室で栽培する高級欧州系ブドウ、「マスカットオブアレキサンドリア」である。これと「甲州三尺」を岡山の広田盛正が交配し、昭和7年に発表した新品種「ネオマスカット」は「アレキ」より耐病性が強く、雨の少ない内陸性気候の山梨では露地栽培出来る、画期的な新品種だった。

　「ネオマスカット」の栽培に悪戦苦闘しているうちに戦争が始まった。第二次世界大戦である。混乱を極めた戦時中だから今のように農薬も入手出来なかったという。敗戦を迎え、世の中が落ち着いてくると、戦火をくぐり抜けた「ネオマスカット」が突然、売れ出したのである。当時、横浜に上陸した進駐軍兵士が「ネオマスカット」を気に入り、多量の注文が来たらしい。50アールの「ネオマスカット」園はほとんどなく、いわば全国一の規模だったから、毎年高値で飛ぶように売れ、新品種に挑戦した父の努力がようやく報われたのである。他にも「ネオマス」を導入した栽培者が山梨県下に２名いたが、各々数本を試作するだけで、いきなり50アールの畑で栽培したのは父親だけだったのである。この園地は後に全国ブドウ大会の視察一号園になった。人気化した「ネオマス」の苗木を求める生産者が多く、この苗木をたくさん作って販売を始めたのが、植原葡萄研究所（昭和28年）誕生のきっかけになった。ブームを呼んだ「ネオマスカット」は、その後、山梨県下で1000haに増殖された。今の「シャインマスカット」の人気は、これによく似ているかもしれない。

３．「甲斐路」の誕生

　1000haを越えて栽培されると、さすがに生産過剰気味になる。「ネオマスカット」の人気に陰りが見えてきた。中には糖度が低く、酸味の抜けないうちに早期出荷して消費者の不評を買うケースも見られた。黄緑色のブドウだから、食べてみないと外観では味がわからないのである。父親は「ネオマス」の将来を危惧して「赤いマスカット」を作ろうと決心した。赤いブドウなら青いうちに収穫出荷するわけにはいかない。だから消費者を味で裏切ることが出来ないのである。昭和30年、交配の親にスペイン原産の赤い品種、「フレームトーケー」を選び、これに「ネオマスカット」を交配したのである。

　この「フレームトーケー」は品質が高く、肉質は硬く、カリカリしている。果皮は薄く、皮ごと食べられるが、成熟期に雨が降ると裂果がひどく、栽培は困難な典型的な純粋欧州種である。果皮の強い「ネオマス」の遺伝子を貰い、裂果しないブドウを作り、しかも「フレームトーケー」の赤い色素を受け継げば、日本の気候でも栽培可能な「赤いマスカット」ができることになる。152粒の種を蒔き、交配して6年後の昭和36年にようやく初結果した「1100番」の赤い実は雨の中、裂果しなかった。食味もよく、高糖度で、美しい先尖り・倒卵形の大粒で鮮紅色の純欧州種、「甲斐路」が誕生したのである。マスカット香はかすかだが、味にコクがあり、実に旨い。濃厚な旨みは間違いなく「アレキ」の血を引く孫だ。昭和52年（1977年）に「甲斐路」は品種登録され、父･正蔵の育種品種を代表する最高傑作が生まれたのである。

　「甲斐路」は美味しいブドウで外観もよく、人気は高かったが栽培は難しかった。純欧州種で病気に弱い。万病に弱いとまで言われたものである。失敗する人が続出する中で、山梨果樹園芸会・初代会長の奥山さん（山梨市）や西野の功刀さん、勝沼の荻原さん（元ブドウ部長）など、山梨のブドウ界を代表するベテラン栽培家が手塩にかけてこの「甲斐路」の栽培に成功してくれた。文字通り、生みの親と育ての親があってはじめて，「甲斐路」は山梨原産の高級種として世間に認められたのである。

　「甲斐路」の枝変わりを山梨市の三沢昭氏が発見し、色素が3倍あり、着色が濃厚でしかも一ヶ月弱も早熟化した「赤嶺」が今は普及している。始めは「早生甲斐路」としていたが、だんだん多くなり、「甲斐路」の栽培に取って代わってしまい、今では「赤嶺」を「甲斐路」として販売するようになった。本物の「甲斐路」をどうしても食べたいというお客様がいるので、私方では仕方なく「本甲斐路」と名付けて栽培している。お客様の味覚は確かであり、味は本物の方がやはり上なのである。いずれ本物の味を知らない世代に世間が交代すれば、残念ながら「赤嶺」が「甲斐路」になってしまうだろう。

４．「ロザリオビアンコの話」

　私は長男で一人息子だったから、迷った挙句、家業を継ぐことにした。父親が虚弱体質で入退院を繰り返し、母親が苦労しているのを見ながら育ったことが大きい。昭和38年、千葉大学園芸学部を卒業すると同時に実家に帰り、家業に就いた。跡取りのご褒美みたいなものだが、当時海外旅行などなかなかできない時代、体の弱い父親の替りに「旧ソ連の果樹栽培視察団」の一員として一ヶ月、ソ連の果樹栽培を視察できたのである。

　父親が親しかった勝沼の土屋長男先生が視察団のブドウのリーダーだった。十勝ワインで有名だった北海道、池田町の丸谷町長も一緒だった。タシケントで数百種の欧州ブドウを栽培している試験場を視察して、感銘を受けた。品質絶佳の皮ごと食べられる「リザマート」（赤）、「カッタクルガン」（黄緑）、レバノン原産の「バラディー」（黄緑）などを食べて、欧州種の品質の高さを実感したものである。

　その後、これらの欧州種がソ連から日本に導入された。また、ソ連旅行に同行した栃木の石崎氏が試食した種を持ち帰って実生を育て、生まれたのが「ユニコーン」であり、命名者は土屋長男先生で、先尖りの珍奇な形状からギリシャ神話の一角獣の意である。私がそれらを交配した中から、今、中国で大栽培されている「マニキュアフィンガー」（ユニコーン×バラディー）が生まれた。中国名は「美人指」である。長楕円形粒で長さは５ｃｍにもなり、粒の先端から鮮紅色に着色し始めるので、この名前を付けた品種である。品質は欧州タイプで果肉が堅く、皮ごと食べられるが、裂果しやすく、日本では施設栽培しなければならずあまり大普及はしていないが、雨の少ない中国内部の気候下では露地栽培でたやすく収穫できる。中国のために作ってやったような品種である。

　さて、「甲斐路」を作ってブドウ界に貢献した父を継ぎ、専門大学を卒業した息子としては、父親に負けない品種を育種して後継者としての存在意義を世に知らしめなければならない。若い頃の単純なライバル意識が、負けず嫌いである私の育種の原動力であった。

　育種は自分の思うようにならない仕事で、運がよければいい品種が生まれるだろうが、こればっかりは、やってみなければわからない。ギリシャの哲人がいったように、「学の道は長く、人生は短い」のだ。短い人生の中でいい品種を作るにはどうしたらいいか。試行錯誤の中で実感したことは、「交配の親より優れた子供が生まれる確率は極めて低い」ということだった。そうであるなら、最高級の品種を親に選ぶべきである。

日本のブドウの歴史が証明していることは、ガラス室栽培の「マスカットオブアレキサンドリア」が断然高い人気を維持していることである。長いあいだ、新宿の「フルーツ高野」ではひと房一万円で売れていたのである。また、世界一の人気品種といえば、イタリアの主要品種である「ロザキ」で、おそらくローマ時代から現在まで人気は衰えていない。これらの名門と名門を親に選べばいい品種が生まれる確率は高いのではないかと考えたのである。1976年（昭和51年）に交配し、その中から生まれたのが「ロザリオビアンコ」である。私はその時、35才だった。

交配して種を蒔き、育てた実生に初結果するまで、欧州系品種は５～６年かかる。やっと実ったブドウは非常においしかったが、あまりにも粒が小さく見劣りして切り捨てようと思った。若い私は気が短かった。しかし、父親に見せると、「ちょっと待て、欧州系ブドウの性質は大器晩成だから、はじめは小さくても年々粒が大きくなるかもしれない。数年間、様子を見たらどうだ」と助言してくれた。この一言がなければ今の「ロザリオ」は淘汰されてしまったはずなのである。すぐに他界してしまった父親のこの言葉は遺言だったと思い、私は感謝している。66才で他界した父親の豊富な経験が「ロザリオ」を救ったのである。

父親の言葉が的中した。「ロザリオ」の粒は年々大粒になり、楕円形～俵型の見頃なブドウになってきた。黄緑色で外観もよく、糖度も高く20度を超え、「アレキサンドリア」に似たコクがあり人気が高まってきた。欠点は萌芽が遅く、不揃いになりやすく、若木時代は徒長的生育をしやすいことである。しかし樹齢が進み、だんだん生育が落ち着くと豊産になり、安定する。「ネオマスカット」より大粒、大房で栽培者も増え、「甲斐路」と「ロザリオ」が山梨特産の高級品種として定着したのである。

私の育種は40年以上続いたが、ブドウ園が狭いため、一度に多量の交配はできない。成らせては切り、数万粒の様々な交配した粒の中からいろいろな品種を発表してきた。その中で多くの栽培者に注目された品種は赤い巨大粒の「ゴルビー」、「ロザリオ」の赤である「ロザリオロッソ」、「ロザリオ」の黒の「ジーコ」、「リザマート」よりやや晩い中熟種の「レイトリザマート」、「ピッテロビアンコ」の赤の「紅ピッテロ」、やや小粒の赤い「アレキ」である「ミニ甲斐路」、「カッタクルガン」の赤の「クルガンローズ」、岡山で成功した晩熟、紫紅色の「紫苑」、観賞用の巨大房種である「レッドネへレスコール」、それに品種登録した早熟巨峰系の「紫玉」などがある。

５．「シャインマスカット」の登場

今、ブドウ界は「シャインマスカット」人気に湧いている。毎年、全国農業新聞に掲載されている日本の果物全品種のランキングで、４年連続、第一位を占めている。この品種の人気は、皮ごと食べられる、種なし、マスカットの芳しい香り、高糖度で肉質よく、大粒で外観が美しいなど、これらの特性が消費者の心をがっちりと掴んだのである。広島県安芸津にある国の果樹試験場が1988年に交配して、2006年に登録された新品種である。親は「スチューベン」×「マスカットオブアレキサンドリア」（母）に「白南」（「カッタクルガン」×「甲斐路」）（父）の交配である。

栽培者にとっていいことは、祖母になる「スチューベン」が欧米雑種であり、「シャインマスカット」の外観は純粋欧州種のように見えるが、米国系の病気に強い遺伝子を受け継いでいるためか耐病性があり、栽培容易なことである。父親の「白南」は私が作った品種で、最高においしいブドウだったが、成熟期になると果皮が汚れて見た目が悪くなり、外観が美しくなくて諦めてしまった品種である。

私方の苗木売り上げランキングでは「シャインマスカット」がトップで、人気は10年を超えるような大ヒット品種だが、そのお蔭で他の品種の苗が売れなくなってしまった。「ロザリオビアンコ」のランクがだんだん落ちて、これからの品種は皮ごと食べられる、種なしのおいしい新品種でなければ普及性がないという時代になってしまったようである。「甲斐路」も種なし化はむずかしく、皮は厚くて食べられないから、時代遅れの品種になった。「シャインマスカット」は育種のハードルを一気に高めたわけである。

そこで、あちこちの育種家が「シャインマスカット」を親にして、種なしで皮ごと食べられる品種の開発を試みる、新たな競争時代に入ったのである。私も、「ロザリオビアンコ」の味、「甲斐路」の旨さを「シャインマスカット」に入れて、「シャインマスカット」の味を超える赤、白、黒の新品種を作りたい。今、すでに数十の新品種を選び出し、試作検討中である。

長野県では「ナガノパープル」という皮ごと食べられる「巨峰」系の大粒黒ブドウを育成し、人気がある。今までは不可能とされていた皮ごと食べるブドウの育種が「シャインマスカット」と「ナガノパープル」で実証され、大成功している。この二品種の登場により、どうやら育種の潮流が変わってしまったようである。

南から北まで、全国的に官民あげての活発な育種競争が始まり、きっと更にいい品種が登場してくるだろう。育種には終着駅はないらしい。